
野田高等学校 第二話

あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野田高等学校 第一話

【ZPDF】

N3187M

【作者名】

あき

【あらすじ】

生徒会委員名簿

生徒会長	：相田（あいだ）
副会長	：神中（かみなか）
書記	：藤（ふじ）
会計	：里川（さとかわ）

生徒名簿

図書収蔵室・谷田（やた）

生徒会長「えへへ。なんやかんやで、一話だ。かつたるい・・・。

」

会計 「生徒会長。そんなこといつたら、この話一瞬で崩壊してしまいますよ。」

副会長 「ふふふ・・・。大丈夫よ、里川君。こんな生徒会長いなぐても、

この小説は成り立つか。」

書記 「その通りです。」

会計 「いや、こんな生徒会長でも、いないと僕たちが困るんですね。」

そもそも、生徒会長がいないと生徒会委員会自体が成り立ちませんからね。」

生徒会長「そんなことはないぞー？俺がいなくとも、お前らならきっとこの生徒会委員会を

存続させることができる。」

会計 「なに責任押し付けようとしてるんですかー！…もつと生徒会長としての威厳とか

ないんですか？！」

生徒会長「そんなもの熱海の海底300メートル付近に捨ててきた。」

会計 「どんだけ深いところに大切なものの捨てててくるんですか

！？！」

それに、熱海の海ってそんなに深かったですか？？？」

書記 「わざと拾つてこいよ、馬鹿。」

会計 「馬鹿って言つたよーーー！生徒会長のこと、この子馬鹿つて言つたよーーーー！」

副会長 「ふふふ。藤ちゃん、その調子よ。一度と這い上がれなく

なるまで、

「テンパンに言つてあげて。」

「副会長までなに言つているんですかあ…………」

生徒会長「あ、やべつ・・・なんか、心臓付近が悲鳴をあげてい

る
・
・
・
。
」

「ほりあーーー生徒会長、心を病んじやつたじやんーーー！」

!

どうしてくれんのお？？！「

生徒会長「さて、話の入りはやつたし。とつととやるか。」
会計「生徒会長。僕、なんで縄で縛られているんですか？」

もしかして、上記の余話氣にして・・・・

書記 「生徒会長、今日の議題は。」

会計 「いや、無視しないで。ちゃんと現実みて。明らかに、あんたらのせいなのに」

僕、縛られてるから。」

副会長 「あら？ そういえば、里川君がまだ来てないわね。遅刻か

۱۵۰

生徒会長「まつたく。教育のなつていないうま男だな。今度、しつかり注意しなければ。」

「なんで僕いなーいことになつてんの?—
やんといふてやるから!—マスクツトじやないから!—ち
「ここにいるから!—マスクツトじやないから!—ち

ガラガラ

生徒会長「おっ。やつときたか。」

会計「なつ！……！」

図書委員長「やあ、相田。遅くなつてしまなかつた。」

会計「や……谷田先輩だとも……あの、スーパー高校生谷田先輩。文武両道、なにを

やらせてもパーフェクト人間で、女子達にモテモテのあ
の谷田先輩が、

どうしてこんな所に？！」

生徒会長「遅かつたな、会計。」

副会長「まつたく。今度からは、氣をつけね？」

書記「次やつたらぶつ飛ばす。」

空気「ぬおい！……なに勝手に変えて……って、肩書き
が『空気』になつてる……！」

だれだあ……勝手に偽造しやがつたのわあ……！」

生徒会長「ともあれ、早く始めて、さつと終わるぞ。今日ま、『

人妻 天竺』を願う』の

再放送なんだから。」

空気「なんじやそりや！行くんじやなくつて願うだけですか！
！……いつたい、なんの

ジャンルのドラマなんですか！……！」

生徒会長「議題は、『昨今の親』についてだ。」

副会長「まあ。生徒会長にしては、恐ろしくまともな議題ですね。」

会計「やつすが相田！……おれ、涙が出そうだよ……！」

書記「書き書き……」

空気「本当だ。なんて平凡な議題なんだ。なのに、僕は話にま
ざれない……」

生徒会長「最近の親は、腐つていると思わないか？子供をあれした
り、学校にはすぐ苦情だし。」

学校は教育をする場であつて、親に付き合つてこいる暇な

んてないんだぞ？」

会計 「おれに親はいないけど、それって愛情表現の裏返しなんじゃないのか？」

空氣 「生徒会長！谷田先輩の暗い過去呼び起しあげますけど…！」

誰か、フォローしてあげて…！」

副会長 「会計君。それは、愛情表現とは言わないわ。本当に子供のことを見つけてるなら、

どんなに苦しくても耐えるのが、親つてものよ。

感情を撒き散らす頭の足りない親を見て、子供が立派に成長すると思うの？」

会計 「でも、あまりにも無関心なのはさびしいよ…。おれだって、じいちゃんに

まつたくもって相手にわれなかつたんだから。」

空氣 「またえぐつちやつたよ。さびしい過去を、またえぐつちやつたよ。」

書記 「やびしくても、私達は生きていかなくちゃいけないんです。親にどう思われようが、

自分自身がしつかりしていなくちゃ、いてもいなくても、結構同じです。」

空氣 「藤さ＝＝＝＝ん！－！－！－！なんてナイスなお嬢様！－！－！

僕、感動して前が見えないよ！－！－！－！

生徒会長 「けど、みんながみんな、藤のよう強いわけじゃないだらけ！」

「ひへー中には、

そんなことをされていても、それでも愛されたいと思つ子供もいるんだ。」

副会長 「そんなことをこつたら、きりがないですよ？」

生徒会長 「きりが無いのは当たり前だ。子供をしつかり教育できな親もその子供も、

がある。

一人がどんだけ

空氣 「生徒会長のこと」が、はじめて本当の、生徒会長、に見え
た・・・。」

会計 「そうだな・・・・。悲しいけど、愛情を注げる人もいれば、逆にまったく愛情を

「なら、どうして子供を産むんですか？育てるつもりなん
を感じない人もいるんだよな・・・。」

「おまえのうつむきは、おれの心事だ。おまえがおれを心配する心地はない。」

副会長 「そうね・・・。子供を産む気がないのなら、せめて何かの手を講じてほしいわね。」

空気 「ああ・・・僕のことなんか、まったく気にも留めずに、まともな会話が進んでいく。」

会計 「おれ決めたよー。そんな苦しんでこいる子供達を救う仕事に就くよー。」

空氣 「今、名前言いそうになりましたよね？絶対いいそうになつたつて！！」

副会長 「あなたなら、子供達に光を与えたれるわ。剛くん！」
空気 「今、名前言いましたよね！この小説つて、名前ついてな

かつたんじや……」
書記「いわゆる、大坂。

「認めた！ 今、僕のこと認めたよ！！なんかうれしいんだ
けどーーー！」

生徒会長、いうなよ、藤。今いい所だつたのに。

書記 「すみません。だつて、うるさいから。」

副会長 「こういうのは、最後まで無視を通して終わるパターンよ？ んもう、ダメじゃないの。」

空気 「無視を決め込むつもりだったんですねか？！ 僕がいったい、なにしたって言うんですか？！？」

会計 「どうした？ 何も無い虚空に向かつてしゃべつて。」

空気 「あなたはもつとひどいよ……みんな普通に話しかけているのに、一人だけ無視を

貫こうとしてるよ……！」

生徒会長 「あー！ そろそろドรามаが始まる！ …藤、今の会話、ぱちり書けたか？」

書記 「はい。始まる前に、原稿を「ペーしてきただのでぱちり書けたか？」

生徒会長 「よっし。」

空気 「何がよっし、だあ！ …あんたらこれ、事前に打ち合わせして原稿まで

作つてたの？ …じゃあなに、結局僕はいつなる運命だつたんですか？！」

会計 「なあなあ。誰に向かつてしゃべつてるんだ？ 幽霊か？」

空気 「てめえはもうしつこいんだよ！ …！」

副会長 「生徒会長。結論がまだですよ？」

生徒会長 「そうだった。えへへへ・・・・・・

みんな！ 子供はもつと大切にしよう！」この国の宝なんだから！」

空気 「短つ！ …なにそのスローガンみたいな結論！ …！」

あんた、いい加減にし

生徒会長 「さよーなら～」

空気 「帰るなああああ！ …自分の役割ぐらい、最後までしつかりやつていけえええええ！ …！」

副会長 「それじゃ、私達もそろそろ帰りましょうか。かつたるい

活動も終わつたことだし。」

「書記
「そうですね。」

「えー、帰つたのですか? なんか、色々と忘れてま
すよね? ! !

! ! !

副会長「谷田君。戸締りお願いね。」

ガラガラ バタン

空氣 「いま、確實に谷田つていつたよね！……認めたんなら、この繩と肩書きどうにか

「あんなお嬢さん。おじいちゃんがいるんだから。」

！二つ子供達を

卷之三

幽靈 「誰がゆづれ・・・つてーまた肩書きを変わつてゐるやうだ

肩書きで、こんな「ひょいひょい変わるものの?!」と

レバカ
薬水でレバの...!!

復讐——死の命——!!

「谷田洗輩!! 三の童子」

かつたんですか！！！！！」

卷之三

「もつ、いじやだ」 = = = = = = = = = =

(後書き)

一話田です。色々ありましたが、なんとか一話田です！
これからもつづく(?)ので、よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187m/>

野田高等学校 第二話

2011年2月3日07時31分発行